沖縄で今、何が起きているのか？

どんなにひどい仕打ちをされても、怒っても、
常にユーモアと笑いを忘れない沖縄の人々の
たくましい“人間力”が心に迫る。
こんなにも生き生きと体を張っているのに、
辺野古の新軍事基地作りは冷たく“粛々”と進む。
見ているうちに、本土の私たちが連帯しないでよいのか、
という思いがこみ上げる。

高畑 勲（アニメーション映画監督）

何度も涙を抑えきれず、声を上げて泣きました。
沖縄戦の悲劇から70年、過去にも未来にも申し訳なくて、
恥ずかしくて、酷い基地建設を正視できませんでした。

加藤登紀子（歌手）

戦場ぬ止み（いくさばぬとうどうみ）
タイトルは、辺野古のゲート前フェンスに掲げられた琉歌の一節に由来しています。
今年しむ月や（くとうしぢち） 戦場ぬ止み（いくさばとうどう） 沖縄ぬ思い（うちなーうむ） 世界に語ら（しけかた）
（今年11月の県知事選挙は、私たちのこの闘いに終止符を打つ時だ！その決意を日本中に、世界中に語ろうじゃないか）

今、辺野古の海を埋め立てて最新のアメリカ軍基地が作られようとしている。巨大な軍港を備え、オスプレイ100機が配備されるそれは、もはや普天間基地の代替施設などではない。

2014年8月14日、大浦湾を防衛局と海上保安庁の大船団が包囲。日本政府は機関砲を装備した大型巡視船まで投入して、建設に抗議するわずか4隻の船と20艇のカヌー隊を制圧した。陸上でもなんとか工事を止めようと市民が座り込みを続ける。基地を作るのは防衛局だが、市民の前に立ちはだかるのは沖縄県警機動隊と民間警備会社。国策に引き裂かれ、直接ぶつかり合うのは県民同士だ。「私を轢き殺してから行きなさい」と工事車両の前に身を投げ出したのは、あの沖縄戦を生き延びた85歳のおばあ。彼女にとって沖縄はずっといくさの島、それを押し付けるのは日本政府だった。

沖縄の怒りは臨界点を超えた。11月の県知事選は保革を越えた島ぐるみ闘争に発展。「イデオロギーよりアイデンティティー」と新基地建設反対の翁長雄志氏が圧勝、続く衆院選でも民意を叩きつけた。しかし国策は止まらない。海上の抗議活動を屈強な「海猿」たちが排除していく。日々緊張を増す現場で負傷者や逮捕者が出る……。はたして今、沖縄で本当は何が起きているのか？

＊ ＊ ＊

本作で三上智恵監督（『標的の村』『海にすわる～辺野古600日間の闘い～』）が描くのは激しい対立だけではない。基地と折り合って生きざるをえなかった地域の人々の思いと来し方。苦難の歴史のなかでも大切に育まれた豊かな文化や暮らし。厳しい闘争の最中でも絶えることのない歌とユーモア。いくさに翻弄され続けた70年に終止符を打ちたいという沖縄の切なる願いを今、世界に問う。

書籍「戦場ぬ止み 辺野古・高江からの祈り」（三上智恵著）1,400円｜大月書店刊｜発売中　@ikusaba2015　fb.com/ikusaba.movie

2016.5.22（日）①14：00　②18：00
（129分）

16:30
辺野古座り込み参加者から報告！

札幌市教育文化会館　4Ｆ講堂（中央区北１条西 13 丁目）
入場料　一般当日 1,000 円　一般前売 800 円　高校生以下無料
主催　映画「戦場ぬ止み」上映実行委員会
問い合わせ先　09020551583
a-sasaki@roukyou.gr.jp